The Japan Society of Educational Sociology

評者の観点から見ればオートポイエティックともいうべき展開を示している。「ポストモダン」を直線的なものと想定された社会発展への問い直しとしてとらえるとき，トロウの図式はまさに「近代」社会に適合したものであった。本書の末尾の第2部第5章はトロウの図式と各国の独自な発展の仕方との組み合わせによる類型化を狙った試みとして興味深い。他の諸国との比較を通して見るならば，日本の高校が形式的に単線性に偏してきたことが，キャッチ・アップ型の経済システムとの依存的関係の中で自己を変化させてきたことの結果であることが分かる。この点において，「総合学科」の試みは，これまでの「総合制」の理念型から見ればかなり異質なものではあるが，キャッチ・アップ型から低成長型への移行に対応する試みとして注目すべきものであろう。他の国との比較の作業は，モデルとなる他国を探すことではなく，むしろ独自な歩みに踏み出したときの位置関係を知るための地図を得ることにあるとしたら，本書の第三の視点はその狙いを十分に達成しているといえよう。

◆A5判　176頁　本体1,600円
学事出版

■ 書 評 ■

宮崎和夫　著

『学校不適応の社会学的研究』

お茶の水女子大学　酒井　朗

本書は，1960年代後半から1980年代前半までの種々のデータに基づいて，高校非進学者，高校中退者，および高校に在学しながらも適応できないでいる者が，いかなる社会的要因によって生み出されたのかを実証的に明らかにした労作である。高校教育がユニバーサル化した中で，そのレールに乗れない「学歴社会脱落者」が生じている。そうした者たちを考察の対象にすることで，学歴社会そのものの問題点や教育機会の不均等の度合いを明らかにして，これからの高校教育のあり方を再検討する必要がある。こうしたきわめて鮮明な問題意識のもとに，計量的研究と事例研究を併用して，問題を生み出す要因の解明が試みられている。

構成は，第1章で研究の目的と方法が示された後，つづく第2〜4章で高校非進学者，高校教育不適応者，高校中退者の順に分析がなされ，最後に全体が総括されるという形となっている。第2章では文部省が1968年に実施した調査に基づいて，高校進学の阻害要因が所得などの直接的なものから，進学率の上昇に伴い母親の学歴などの間接的なものに移ってきたことが指摘されている。また1970年代後半のある中学校の卒業生を事例に，高校非進学者の進路選択について考察がなされている。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

第3章では，1981年に筆者らが兵庫県で実施した高校生調査の結果をデータに，生徒の学校不適応の様子とその要因が分析にかけられ，不適応は高校のランクにより規定されているが，それ以外にもその高校に志望して入ったかどうかで大きく左右されると指摘されている。また不適応には，学習面での不適応，教師などへの不適応，学校そのものへの不満，交友関係での不適応など，いくつかの側面があり，諸要因の規定力は不適応の側面毎に異なることも見出された。

つづく第4章では，中退者の実態が報告された後，兵庫・大阪・岡山の中退者に関するデータを九州のある県の一般高校生を対象とした調査結果と比較分析し，中退者は市街地在住，ブルーカラー出身層，所得が中以上の家庭の子弟で，学業成績の低い者に多いことが明らかにされている。ここでも事例研究が行われ，志望外の高校に入学した者，あるいは高校進学を希望しないにもかかわらず進学させられた者たちが，どのように中退していったかが描かれている。

以上が本書の概要であるが，この本の最大の意義は，非進学や中退を含めた広い意味での学校不適応問題を，生徒の社会的属性に関連づけて捉えようとした視点にある。近年，不適応や逸脱の研究では，「不登校」などのカテゴリー生成の問題に関心が向けられがちである。また生徒自身に焦点をあてる研究では，ストレスなど心理的側面に焦点が当てられる傾向が強い。筆者自身は明言していないものの，本書はこうした研究動向に対し，もう一度生徒自身のおかれた社会的経済的状況に注目せよという警告の書となっている。

本書の第二の意義は，計量的研究と事例研究を併用し，可能な限り不適応の実態に迫ろうとした点である。事例研究では，様々な属性を持った生徒たちがどのようにして高校に進学することをやめた・断念したのか，あるいは高校をどのような理由から中退するに至ったのかが詳細に描かれており，生徒の不適応問題を考える上で様々な示唆を与えている。

第三は，調査時期に関わっている。本書は高校進学率が9割を越えた前後の時期を対象に，不適応問題を規定する要因の質的変容や，当時の生徒の意識を描いている。筆者自身は，この時期の「『学校不適応者輩出のメカニズム』の基本構造そのものは今も全く変わっていない」(240頁）と述べているが，評者はむしろ当時と90年代の「今」とで変化がないかどうかを吟味することこそが実証研究の課題だと考える。そういう時間軸を設定して読み解くとき，本書はいっそう意義深いものとなる。

以上のように，本書はきわめて実証的に不適応問題に迫ろうとしているが，実証のあり方そのものにはいくつか疑問が残る。その一つは中退者の要因分析である。兵庫・大阪・岡山の中退者と九州のある県（S県）の一般高校生を比較して中退者の特性の解明を試みているが，ここには地域差のバイアスが入り込んでいないか。中退者が市街地在住者に多いのはそれゆえではないか。

第二点目は事例研究の位置づけである。事例研究は計量的研究では明らかに

NII-Electronic Library Service